2019.4.21

大草

**唯識思想とコンプライアンス（骨子）**

第○章　唯識思想とコンプライアンス

目次

１．はじめに

２．唯識思想の概要

　2.1　唯識とは

　2.2　深層からの健康

　2.3　表層心と深層心

　2.4　正聞薫習

　2.5　安危同一

2.6　五位百法

　2.7　阿頼耶識縁起

　2.8　円成実性の世界

３．コンプライアンス違反とは

3.1　事例1　タバコのポイ捨て

　3.2　事例2　掃除

　3.3　事例3　ゴーン氏

４．今後のあり方

　4.1　コンプライアンスの種子と薫習

　4.2　コンプライアンスの表象

５．まとめ

**１．はじめに**

唯識思想の概要を説明し、唯識思想が今日のコンプライアンスの向上に非常に役立つ側面を持っていることを説明することがこの小論文の目的である。

唯識思想は、4世紀にインドの僧侶の無著と世親という兄弟によって完成された仏教上の思想である。宗派では南都六宗の一つである法相宗に当たり、奈良興福寺が総本山となっている。

**２．唯識思想の概要**

　これまで読書メモで報告してきた内容を説明する。特に断りのない意見は、横山紘一氏の見解である。

2.1　唯識とは[[1]](#footnote-1)

・唯識とは、心に映し出された表象をあらわす。ただ表象があるのみで、外界の存在物はないという思想である。（唯とは「ただ…のみ」という意味）

　注）表象とは、ことばや音楽などによって心につくりだされる心理的な形や姿。イメージ。

・「識」とは、視・聴・嗅・味・触覚器官及び思考力を媒介とする六種の認識機能（六識）である。広義の「識」には「意」と「心」も含む。

・「意」は「識」に伴う自我意識（末那識）をあらわす。

・「心」は通常の認識機能の根底にある潜在意識（阿頼耶識）をあらわす。

・六種の認識機能（識）と自我意識（末那識）とは、潜在意識（阿頼耶識）に対し「現勢的な識」といわれる。潜在意識が現勢化し、現勢的な識がその余力を潜在意識としてのこすことが「識の変化」である。認識の機能をただその現勢的なあり方においてのみとらえるのではなく、機能の根底に自我意識や潜在意識のあることを認めて、それらをも「識」とよぶところに唯識学派の識論の特色がある。「識」が自らの作用を知らしめる標識が表象である。

・原始仏教以来、人間存在は諸種の構成要素の集まりとみなされ、構成要素以外に恒常不変の自己（アートマン）があるという見解は否定されている。アビダルマ哲学者たちは、考察の範囲を人間存在を超えて人間のかかわる世界にまで及ぼし、究極的な存在要素を（１）物理的な存在（色）　（２）心　（３）心作用（心所）　（４）心に伴わぬもの（心不相応行）　（５）無制約的な物（無為）の五種に分類した。唯識体系においては、心すなわち識がこれらのすべての存在要素を統合すると考えられる。さまざまの知的・感情的・意志的な心作用は心を離れてあるものではない。心と心作用は同一の認識器官を媒介としておこり、同一の対象をもち、同一の時にはたらく。心はつねに諸種の心作用と連合しているのである。そして物質は存在も実は心のあらわれにほかならないとされる。

・世界は心の中に収められ、その心は生じた瞬間に滅して、次の瞬間の心と交替し、こうして生滅する心が一つの流を形成する。人間存在は「心の流れ」であり、心を離れて外界に存在すると一般に認められているものも、心が生み出した表象にすぎない。外界の物質的存在が心に映写されて表象が形成されるのではなく、心が自ら表象を生み出すのである。

・このような唯識思想は、大乗仏教における観念論の哲学と性格づけられるであろう。

2.2　深層からの健康[[2]](#footnote-2)

・不健康とは、煩悩を持った心のことをさす。⇒健康とは、心に煩悩のない状態をさす。

ⅰ．煩悩（六つの根本煩悩）

（１）貪（とん：むさぼり）

（２）瞋（じん：怒り）

（３）癡（ち：無明）

（４）慢（まん：うぬぼれ）

（５）疑（ぎ：疑い）

（６）悪見（あくけん：間違った見解）

ⅱ．随煩悩（根本の煩悩から生じる付随的な煩悩）

忍、恨（こん）、覆、悩、嫉、慳、誑（こう）、諂(てん)、害、憍（きょう）、無慚、無愧、

じょう挙、恨沈（こんじん）、不信、懈怠、放逸、失念、散乱、不正知

2.3　表層心と深層心2

☆表層心（眼、耳、鼻、舌、身、意の六識のこと）

纏位（てんい）の煩悩：まとわりつく煩悩のこと。表層心から深層心に蒔かれた煩悩の種子（しゅうじ）は、その種子から再び表層心に煩悩が生まれる。相縛（煩悩）・・・憎い、許せない、欲しいなどの煩悩のこと

☆深層心（末那識（自我意識）と阿頼耶識のこと）

随眠位（すいめんい）の煩悩：眠っている状態の煩悩のこと。

相縛（煩悩）は、深層心に麁重爆（そじゅうばく）という煩悩の種子を植えつける。

⇒この種子を何とかせねばならない。煩悩の種子でなく、善に繋がる種子を蒔く必要がある。

いわば、コンプライアンスの種子、善の種子を阿頼耶識に蒔かねばならぬということ。阿頼耶識の浄化は、正しい教えを繰り返し学ぶこと（正聞薫習）で可能となる。唯識では、「現行（げんぎょう）は、その種子を阿頼耶識中に薫習する」と説明されている。

2.4　正聞薫習（しょうもんくんじゅう）2

・正しい教えを何度も繰り返して、聞く・読むなどして学ぶこと。これを通じて、阿頼耶識（=深層心）を浄化する。そうすれば、阿頼耶識に潜在する「清浄な種子（しゅうじ）」が生育し芽吹く。

2.5　安危同一2

・阿頼耶識と身体のいずれかが安らげば、他方も安らかになる。一方、いづれかが危うい状態になれば、他方も危うくなるということ。

・身体の具合は、深層心に原因があり、深層心のありようは身体のありように左右される（表層心と深層心は相関関係にある）。

・真の健康は、深層心の健康にまで深めなければならない。

・表層の身体のありようには、常に留意しなければならない。姿勢を正す、運動する、過食しないなど。

2.6　五位百法[[3]](#footnote-3)

・唯識では全ての事象を五位百法という形に分類している。

・五位百法とは

① 心（８）眼・耳・鼻・舌・身・意の六識と末那識・阿頼耶識。

② 心所（５１）

　　(ⅰ) 遍行（善悪を超えた普遍的な心）として、作意・触・受・想・思の５種。

　　(ⅱ) 別境（特定対象に関連して起こる心）として、欲・勝解・念・定・慧の５種。

　　(ⅲ) 不定（縁により善悪となりうる心）として、悔・睡眠・尋・伺の４種。

　　(ⅳ) 善の心所（よい心作用）として、信・慚・愧・無貪・無瞋・無癡・勤・軽安・

不放逸・行捨・不害の１１種。

　　(ⅴ) 煩悩（基本的煩悩）として、貪・瞋・癡・慢・疑・悪見の６種。

　　(ⅵ) 随煩悩（付随する煩悩）として、忿・恨・覆・悩・嫉・慳・誑・諂・害・憍・

無慚・無愧・掉挙・惛沈・不信・解怠・放逸・失念・散乱・不正知の２０種。

③ 色（変化する物質的なもの）（１１）眼・耳・鼻・舌・身の五根と、色・声・香・味・

触法の五対境、および意識のみの対象である法処所摂色の１１種。

④ 心不相応（以上のいずれでもない存在）（２４）得・命根・衆同分・異生性・無想定・

滅尽定・無想報・名身・句身・文身・生・老・住・無常・流転・定異・相応・勢速・次第・方・時・数・和合性・不和合性の２４種。

⑤ 無為（６）虚空・択滅・非択滅・不動滅・想受滅・真如の６種。

・最近の量子論は、物の最小単位である素粒子もある一定の大きさを持った粒子ではないという結論に達した。しかもその存在のありようは、観察する側の心のありようによって左右される、すなわち、私達は、物に対しては観察者ではなく関与者であるという事実が発見された。

・物とは何かという存在観を根底から変えた二つの科学的発見・発達が２０世紀にあった。それは、「相対性原理」の発見と「量子力学」の発達であった。

・自己究明とは、新しい自分に目覚めること。煩悩に苦しむ自分を究明し、煩悩をなくすぞと決意する新しい自分に目覚めること。

・この“いのち”の中に流れきたった太古の“生命”

　原始生命→単細胞→海中生物→陸上生物→猿人→原人→旧人→新人→父と母→私の命。

　座禅を通じて生の生命（細胞や遺伝子に分析されたもの）に触れて、自分自身の“いのち”（一つの総合的なもの）を観察の対象として何であるのかを追求したいと思い始めた。静かに心を落ち着けて、一息一息になりきり、なりきってみると、驚くべきことに、それまで囚われていた「自分」が“いのち”の中にとけ込んでいく。いま、ここに生きていることの不思議とありがたさとが、ますます明瞭に意識されてくる。「生かされてあるのだ、ありがとう！」叫びたくなる。

・強い決意に基づいた言葉は、必ずや深層心に阿頼耶識に薫じられて、次第次第にその人の生き方を変える。

2.7　阿頼耶識縁起[[4]](#footnote-4)

　・表層の行為のありようが、深層の阿頼耶識に影響を与えるのであり、表層の行為は必ず深層の心に影響を与えるという理のことを「阿頼耶識縁起」という。この理に気付けば、私たちは一瞬一瞬の自分のありようを正していかねばならないと考えるようになる。

　・「自分のありよう」を分析すると、身体的、言語的、精神的な三つに分かれるとされる。いわゆる身・語・意の三業（さんごう）といわれるもので、前の身と語の二つは、意業すなわち意思の働きから生じてくるとされる。なにか身体を動かす、あるいは語るという行為の奥には必ず意思がある。

　・意思という、すべての行為を生じるこの根源的な心の働きに、私たちはほとんど注意を向けていないといわれる。

・今日は何をしたいのかと自分の心の中の「意思」に問いかけてみよう。すると、「今日は掃除をしなければならないのだ」という義務的な言葉ではなく、「今日は掃除をしたい」という願望的な言葉が心の中に生じてくるという。

　　　→（筆者コメント）小さなコンプライアンスをいつも唱えていると、深層心にコンプライアンスという種子を植えつけることができ、やがて大きなコンプライアンス意識が芽生え、次にその実践がなされることに繋がっていくのではないだろうか。

　　　　また、自分はコンプライアンス違反をしようとしていると仮定する。違反行為を実行することは、自分の心を汚すこととなり、阿頼耶識に不正への種子を撒くことにほかならないと自覚することができる。そして次に、その種子は更に大きな悪を生む種子に繋がると考えて、悪行を思い止まることができるのではないだろうか。

2.8　円成実性の世界4

ⅰ遍計所執性（ﾍﾝｹﾞｼｮｼｭｳｼｮｳ）：自分とものに執着して生きる世界。

ⅱ依他起性（ｲﾀｷｼｮｳ）：他に依って生起するもの。他の力によって生かされてある世界。

ⅲ円成実性（ｴﾝｼﾞｮｳｼﾞｯｼｮｳ）：清らかに成りきった世界。

手足・心臓・胃など60兆の細胞からなるこの身体の隅々までが、自分のいのちを支えてくれている。これは感謝の気持ちに繋がるものである。

自分は「依他起性」の世界に生きている。生きているというより生かされてあるという事実。不平不満の気持ちを感謝の気持ちに切り替えてみてはどうか。

自分のものでない、全ての臓器・細胞に感謝し、どうか今日一日も元気で過ごさせてくださいと手を合わせて祈ること感謝する心→深層の心に影響を与え心の底から浄化されていく。→清らかに成りきった心で生きる世界。→仏陀のみが生きることのできる世界。それを「円成実性の世界に生きる」という。その世界にいつか至ることを理想として、清浄な世界を目指して一歩一歩歩み続ける決心をするだけで生きる勇気がわいてくる。

**３．コンプライアンス違反とは**

・コンプライアンス違反は心の病の顕現化したものと筆者は考える。

・心の病とは、心に煩悩がある状態のこと。

・違反事例1．タバコのポイ捨て

　　タバコの吸い殻を捨てる行為は、小さなコンプライアンス違反といえるが、この行為は本人の表層心を汚すことに繋がっており、しかも深層の心を汚していることに本人は気が付かない。小さなことでも「塵も積もれば山となる」という諺と同じように、知らず知らずのうちに、自分を深層から変えて行っていることに気付かねばならない。

・違反事例2.　掃除義務違反

　　掃除をする義務を怠ることは許されない。掃除をせねばならない（義務）→掃除をしたい（願望）へ。→掃除することに成りきる！　成りきるとは、自分と他者と行為を区別せずに行動すること。この無分別智が、深層の心を浄化する。自然には、分別やはからいはない。ただ成りきることで、人に感動を与えることができる。行住坐臥（日常の何でもない所作）の行為にも唯だ成りきることが大切である。

　　「無分別智」とは「自分」と「他者」を分別しない智慧であり、この智慧が深層の心の浄化に大きく貢献するので、重要である。

　　筆者は、形式的なことでもそれを繰り返し行うことで、深層心（阿頼耶識）にコンプライアンスの種子を撒くことになり、やがて立派なコンプライアンスの樹木の芽が出ることに繋がると考えられ、企業のコンプライアンスの向上に繋がっていくと考える。

・違反事例3.　ゴーン氏

　　日産自動車(株)の元会長は、日産の資産を個人的に流用したとされ特別背任罪で逮捕されている。もともと20億円の莫大な年収を得ているにも関わらず、会社の資産、経費を私的に使ったというのである。それも日産だけに止まらずルノーでも同様のことを行っているとのことである。人間の欲には限りがなく、煩悩に苛まれた果ての姿がゴーン氏に見える。自分の表層心だけでなく深層心から守銭奴という悪の花が開いてしまったといえるのではないか。

　　筆者は、不正を行う心は、煩悩にとらわれた心であり不健康な状態にあると考える。不健康な心の状態から、健康な心になるためには、心を浄化し煩悩にとらわれない心にすることが必要であると考える。即ち、円成実性の項で述べたように、清浄な世界を目指して一歩一歩歩み続けることが、コンプライアンス向上の心に通じると考える。

ゴーン氏には、感謝する心がないために深層の心が浄化されることなく、悪の花が咲くということができるのではないか。

**４．今後のあり方**

4.1　コンプライアンスの種子と薫習

　・阿頼耶識から悪の種子が芽生える

・心の深層を知らない間に汚す

・表層の行為が心の深層に与える影響

・コンプライアンス意識の注意喚起や研修の繰り返し（薫習）

　4.2　コンプライアンスの表象

　・自分の意思とは。心の深層における種子が芽生えてきたもの。

　・コンプライアンス経営

　　これまで見てきた唯識思想を現代の経営者層を中心として国民に広く広めていくことが、日本国民全体のコンプライアンス意識を高めていくことに繋がっていく。人間の心にアプローチしていく唯識思想のあり方が、コンプライアンス水準を向上させていく一つの有力な方法といえるのではないか。

**５．まとめ**

・正しい種子を繰り返し、薫じることにより、心の深層に正しい種子が芽生えてくる。

・時間はかかっても、即席の対症療法ではコンプライアンスの確保に繋がらない。心の深層に響くものでなければならない。

・組織の体質を少しずつ変えていくことが、コンプライアンスの確保に繋がっていく。手間暇と長い時間のかかる道のりであるが、これが王道。

・歴史あるコンプライアンス経営の行われている企業の企業体質は、基礎がしっかりしている。

以上

1. 服部正明・上山春平「仏教の思想４　認識と超越　<唯識>」（角川書店1969.6）から。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 横山紘一「唯識」深層からの健康　NHK教育TV「こころの時代」（1997）から。　 [↑](#footnote-ref-2)
3. 横山紘一「阿頼耶識の発見　よくわかる唯識入門」（幻冬舎2011.3）から。　 [↑](#footnote-ref-3)
4. 横山紘一「唯識の思想」（講談社2016.3）から。 [↑](#footnote-ref-4)